



左：台湾（TOTA）からのトラベリングフェローJonathan Lo（ロー）と KNUH 手術室にて。カナダの帰国子女で、言語も性格も北米訛りでした。

右：CW Oh 教授はマスクレ法の 2nd stage（骨移植）を用意してくれており、治療期間の短縮を目的に BMP を積極的に使用している、とのことでした。レジデント不在のため、外傷部門専属の秘書さん（元 ORP：マニキュアにも注目ください）が術中マクロ写真撮影など、手術室や外来で多くの業務をサポートしていました。



左：KNUH 近くのサムギョプサル店にて、ローと、セント（KFS と無関係のタイからの短期 follow、本名 Peeranut Purngpiputtrakul は読めません）と、海外 fellow 慰労会。

右：KNUH の Joon-Woo Kim 教授と KFS 晚餐会にて。大邱では、毎日ランチタイムに、病院近くのローカルレストランでご馳走していただきました（下図：左より、カルグクス、チヂミとポッサム、韓国チキン甘辛ガーリックソース、鶏肉と春雨のスパイシー煮込み）。





左：KFS 晩餐会での各国 fellow への certificate 授与式

右：授与式でのスピーチが思いのほか大ウケし、演題発表よりも達成感がありました。



ご高名な先生方にも名前と顔を少しだけ覚えていただけたようでした（左より、Tim Pohlmann 教授 from ドイツ、筆者、Peter Cole 教授 from USA）。



左：帰国前夜には、親友の Ji-Wan Kim 教授（Asan Medical Center）に江南（カンナム）で、北朝鮮式のそば粉で作る平壤冷麺と本場のプルコギ（中央）をご馳走してもらいました。

右：KFS 若手のホープ Won-Tae Cho の顔を、是非とも覚えておいてください。